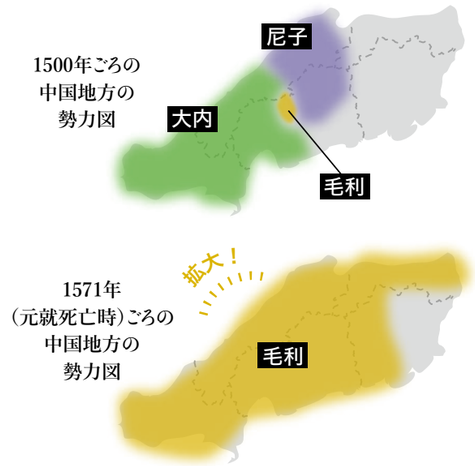
毛利元就のここがすごい！4選

すごい！1 領地拡大

争いが繰り返される波乱の中国地方を一代で支配下に



元就が生まれたころ、現在の広島県あたりには、安芸国と備後国の2つの国がありました。安芸毛利氏の領地は現在の吉田町のあたりで、周辺には多数の国人領主がそれぞれ領地を持っていました。

この頃、尼子氏が出雲を拠点とした戦国大名となり、山陽から九州北部にかけては山口の大内氏が勢力を伸ばしていました。

中国地方ではこの尼子氏と大内氏が争いを繰り返し、安芸の国人領主たちは領地を守るため、2つの勢力のどちらかに加勢し、協力や対立を繰り返していました。そのような状況の中、元就は混乱の中国地方を支配するまでの戦国武将へとのし上がるのです！

すごい！2 情報収集能力に長けた頭脳派

歴史史料として、元就が書いた手紙が多く残されています。その量が同時代の他の武将に比べ多いことから、他の武将と多くのやりとりをしていたと推測され、情報収集能力に長けていたと考えられます。当初毛利氏は、安芸国内の一国人領主でしたが、こうして集めた情報を基に、情勢を的確に判断しながら、混乱の世を渡り歩いてきたと考えられます。また、敵国の内部分裂を誘うなど、調略にも優れていました。

必勝のための事前工作

1555年
厳島合戦 vs 陶晴賢

戦の前に綿密な調略を行うのが元就流。相手をけん制するために、あらゆる手段を使って周辺国を味方につけます。戦力差を埋めるために、複数の家臣の寝返り工作や内部分裂を誘うために偽装文書を用いたといわれています。

非情なだまし討ち

1562年
石見銀山 山吹城の戦い vs 本城常光

武勇に優れた本城常光が守る城を包囲していた元就は、領地の安堵などを常光に約束し降伏を打診。これに応えて常光は降伏し開城しました。しかし、何度も味方に付く勢力を変えていた常光に不信感を抱いていた元就は、冷酷にも常光とその一族を殺害します。

優れた先見の明

1566年
月山富田城の戦い vs 尼子氏

尼子氏との最後の戦いでは、兵糧攻めで富田城を攻めます。追い詰められた尼子氏は降伏。その後、尼子氏の当主ら3兄弟を殺さず、生かしたのは当時では珍しいことです。その裏には、殺害することで遺恨が残り領地を統治しにくくなることを考慮したものと考えられます。

すごい！3 逸話に残る「家族の絆」

元就の逸話として有名な「三本の矢」。元就が死ぬ直前に3人の息子（毛利隆元、吉川元春、小早川隆景）に矢を使って、兄弟で力を合わせること、家族の団結の大切さを説いたお話です。この逸話の元になったとされる通称「三子教訓状」（毛利家文書405）の複製は、歴史民俗博物館で展示されています（特別展の期間中は除く）。

安芸高田市観光協会が販売している「三子教訓状ミニレプリカ」

【第一条】毛利家の名を末代まで絶やさぬように
【第二条】元春と隆景は他家を継いだが、
毛利家を忘れることはあってはいけない
【第三条】三人は少しでも分け隔てがないように、
そんなことがあれば三人とも滅亡する
【第四条】隆元は元春・隆景を力にして
家の内外を治めなさい
【第五条】隆元は親心をもって接し、
元春、隆景は隆元をたすけるように

「三子教訓状」（現代語訳一部抜粋）

すごい！4 戦国時代が終焉（しゅうえん）を迎えた後も存在感を発揮

関ヶ原の合戦後、毛利氏当主だった元就の孫、輝元が長州藩の藩主になりました。西軍として徳川に敗れて以降、今の山口県の一部にまで領地は縮小。しかし、260年あまりの間大名家として続いていきました。幕末になると長州藩からは吉田松陰や高杉晋作、木戸孝允、後の初代総理大臣になる伊藤博文など、その時代の顔ともいえる人物を次々と輩出していきます。彼らは薩摩藩と薩長同盟を組み、倒幕、明治維新の原動力となりました。幕末でも、元就は藩祖としてあがめられていました。